

淨土

1979-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別投函業務認可)第三三三〇号
昭和五十四年九月二十五日印刷 昭和五十四年九月一日発行
第四十五卷 第十号



S. Koyz

実践仏教

九月の初旬は、大正大学の各宗派が、学生の「実践仏教」と称するものを、各本山でおこなっています。大学においても、各宗派所属で僧侶になる学生には、一週に一回法式を



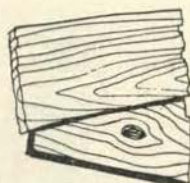
教える時間があります。しかし夏休み終りの、一週間の「実践仏教」は、学生は二年間にわたってかならず受講しなければなりません。天台宗は比叡山、真言宗豊山派は奈良の長谷寺、真言宗智山派は京都の智積院、浄土宗では本年は、総本山知恩院でおこなっております。浄土宗の場合は一年おきで、東京の増上寺、鎌倉光明寺と移動しておこなう年と、京都知恩院、青竜寺と移動して行う年があります。これを受講しないと、浄土宗では僧侶になる加行が受けられません。大正大学ではこの他一般の寺院関係以外の学生を対象とした実践仏教が、本年は比叡山と、智積院でおこなわれています。

一般学生の方は、あくまで宗教の学校に入

った学生に宗教的雰囲気にしたって貰うのが目的で、日常勤行とか、講義を中心としております。夜はキャンドルサービスのようなこともやっております。宗派関係の方は、浄土宗の場合は朝、昼、夜の勤行をはじめ、法式と講義で、びっしり予定がくまれています。それでも最初の頃は、頭の髪をのばしたままきた学生がおりましたが、この頃では、全員頭を坊主頭にしてます。やはり一年生は埼玉校舎で一年間僧堂教育と称し、寮生活をする指導のおかげと思います。

現在の社会は、スポーツの世界でも、管理、指導がよくないと勝てないと申します。現代の子供は、とくに大学生は、過保護に育っておりますので、そういう雰囲気です。ていつてい管理、教育指導をしないと、自分からはやりません。やらねばならないような環境をつくるのが、僧侶の修業にも必要です。この頃の弱い日本のスポーツ界にも同じことが言えます。

(佐藤行信)



九品の行はただ念仏にあり。

——『選訳本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.76)

目次

法話

弥陀の御心にふれて……………成田光俊……(2)

日中往来の昨今……………大田秀三……(6)

〈随想〉ほとけとの出会い(四)……………佐竹隆三……(10)

〈連載〉

六時礼讃の「無常偈」に生きる(7)……………安居香山……(19)

善導大師の生涯とその教え(10)

『観経疏』—玄義分・序分義—……………(22)

「人生の糧」に想う……………宝田正道……(14)

〈創作〉石畳……………渋谷賢応……(26)

③①②③ 大仏はんにご挨拶……………西本恒夫……(34)

浄土句集……………一田牛畝選……(32)

〈表紙裏・巻頭言〉実践仏教……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑥——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

法 話



弥陀の御心にふれて

なり た こう しゅん
成 田 光 俊

(横須賀市専福寺住職)

お十夜の夜道にひかるすすきの穂

親さまと手を取りあえる善の網

ビルが建ち、宅造が進み、都市化の波が次々に押し寄せてはいるものの、ビルの谷間から見ると月は味気なく、美しいすすきの林に立って眺める月は、同じ光ではあるけれども心に安らぎをあたえてくれる。

縁側にすすきの穂をかざってのお月見は、もう遠い想い出なろうとしているけれども、月を眺める心のなかには、すすきの美しい銀色の姿があるのかも知れない。それとも見る月と、眺める月のちがいが、心の中に違った姿を写しているのかも知れない。

自然が消えたように、すすきの穂も少なくなった。淋

しい。だが所用で乗った電車の窓から、すすきの林が見える。

このすすきの穂が目立ちはじめると、秋が訪れ、いつとはなしにお十夜会が近づいてくる。野を歩ゆんでゆくと、銀色の光が一条の白道をつくっている。

それはあたかも、罪の中で日々を送り、苦しみに悶えているわたしたちを、暖かい心で包んで、泣き震える身を安らぎにとお導き下さる阿弥陀親様の広大慈恩の道に似通っている。

わたしたちの日々はあさましいもので、顔を美しく化粧し、身は奇麗に着飾っているものの、心の中は常に強い執着心に満ち、情愛の心を燃やしながらも、互に憎

悪の念も持ち続けてもいる。

新聞には、悲しい記事がつねに載っている。老人がお金を取られた。若い女性が、無惨な姿で殺されてもいる。悲しいことだが、いま問題の映画である「息子よ」のようなこともある。これほど重大なことでなくても、わたしたちの日々は、他人に迷惑をかけている日々の連絡である。

気が付かず目にも見えねどいつの間

ほこりの溜るたもとなりけり

ついこの間から着始めた背広だったが、いつとはなしにもうポケットにごみが溜っている。誰れも、ごみを入れようとは思わなかったけれどもいつとはなしに入っている。

わたしたちもこれと同じように、知らずに他人を傷つける場合もある。迷惑をかけた時もある。それは、戒律を守っているよ、という信心深い人であっても一日のうちに腹を立てることが、ないとは言えない。かりに、腹を立てたことはないと言っても心をかき乱すことが、あるかも知れない。まして平凡なわたしたちは、近所の人が集まって小声で話をしているのを見ただけで、「悪口

を言っているのか」と、猜疑心を起し、表面では良いことを言いながら、他人が幸せになると嫉妬心を燃やしてもいる。

会議の中で、「世の中が悪くなった、どうしたらよいだろう」と、話し合ったことがある。種々雑多の意見がでた。だが、その中で一番多かったのが、「法律をつくらうよ」ということである。

この答えこそ、一番簡単なものである。しかし、この一番簡単な答えが、わたしたちの現状である。それは、姿でもある。

「良くしよう」という約束は出来る。だが肝心なことは、それを守ることだ。それが出来ないのである。

わたしたちの心にある煩惱は、守ることの困難さから、一番安易な法律をつくり、自分の行動を受けるのはいやだ。そこで規制をしている。支えをもたねばいられない。

浄土宗の高祖善導大師さまは、煩惱無尽であるわたしたちに、何度となく「大丈夫か、大丈夫か」と呼びかけつづけている。

が、わたしたちは、善導大師さまの、その暖かい呼び

かけにも答えようとしなさい。

このような罪業をもつわたしたちを、なんとしても救わなければならない、とお心に強く誓われて、五劫という永い年月を修業された法蔵菩薩さま、阿弥陀様の目に涙を浮かべて、じっとわたしたちに慈悲の眼差しを向けられている姿にも気がつかないでいる。

待ちわびてうらむと告げよみなひとに

ナムアマミダブツの声のおそきを

せつかくの広大慈恩のお心も、わたしたちには、ビルの谷間から見る月のように、無感動になってしまっている。

わたしたちは死を恐れる。なぜ、死を恐れるのでしょうか。

それは未知の世界への恐怖である。

生れたときには、同じ未知でも、生という世界のなかで、可能性のある未知に明るい希望を、かってに持っているのである。明日なにおきるかも解らず、そして心のなかに煩悩のほむらを燃やしつづけている。

解らない世界には不安を抱き、感じる。それは生の世界も解らないのだけでも、明るいところには可能性を

感じ、暗いところには不安を感じるのが、わたしたちの姿なのでもある。不安がつのもつてくると、恐ろしくなり逃れたいくなる。もがき、苦しんでも、それは出来ないことである。あまりの苦しさで、心の平静さをも失いつつある。

そして、この世界を、本当に見ようとする心に欠けている。あ、そんなものがあるのかな、と、覗くだけになっている。

しかし阿弥陀親様は、苦しみもがいているわたしたちの姿を見つめて、身がハッ裂きになっても、粉微塵になろうとも、すべてのわたしたちを救う、安らぎの国、浄土をつくろうと難行、苦行をされたのである。

阿弥陀親様がご苦労されておつくりくださったお浄土でも、勉強が出来る人だけが行ける。善の日々を送った人だけ、修行をした人だけが行けるのでは、殆んどの人には無理なことである。

阿弥陀親様がおつくりされたお浄土は、お浄土に行きたい、と願った人がすべて、一人も欠けることなく行けるのである。そしてこのことを、元祖法然御上人は、わたしたちに教えられている。

遊女の例をだしながら、熊谷入道のたとえを出しながら、煩惱の性に泣く姿で、無常の身を震るわす心のなかで、助けを求め、阿弥陀親様のお慈悲に縋って、南無阿弥陀仏と、真心から称えたときに、お浄土に行くことが出来るのである。

それは、すすきの原でじっと月を眺めたときに、いつとはなしに心が安らかになるのと同じである。月を眺めたい、心のなかが一心に眺めるように阿弥陀親様に真心から縋ってゆく姿が必要なのである。

この電車が行きつく先も、一人の少女の迎えである。

少女は二年前に家出をした。それも一片の紙も残さない家出であった。親は悲しみ、四方八方に手をつくして探した。だが、少女の消息は解らなかつた。夫に先立たれ女手一つで育ててきた母も、半年前に病の床にある。その母のもとに、少女からの手紙が舞いこんだのが、すすきの穂が目立つ十夜の時期だった。母親に代って迎えに行くのもつらい。

少女はつかれはてた体を施設に休めたときに、二年前に別れた母の顔を想い浮かべた。笑顔で手を差し伸べる姿を心に描いたときに、思はず「お母さん」と叫んでい

た。そしてせきを切ったように手紙に筆をはしらせてもいた。

わたしたちも悩み苦しんでもだえるときに、素直に阿弥陀親様の御名を称えて、しっかりとそのお胸に抱かれたいものである。

わたしたちとお浄土とは十万億の隔たりとききますものの、この道のりを南無阿弥陀仏と行き通っているのである。

南無阿弥陀一声ごとに十万億

なに遠からん行き通うなり

いま少女は、遠い二年間の道のりを乗りこえて、母娘ともどもに手を結びあっている。

お十夜にお参りに来られる人たちは、本堂の前に結ばれた白道に手をふれられ、親様と手を取りあえる姿に感謝して、心の安らぎのなかで日々を過っていただきたいのである。

煩惱を持ち、身も心も汚れているわたしたち、そのわたしたちを、そのままでの姿で迎え入れる浄土をおつくり下された阿弥陀親様に心から感謝する日々を送りたい。



◇◇◇日中往來の昨今◇◇◇

おお た しゅう さん
大田 秀三

(日中友好浄土宗協会副理事長)
高崎市安国寺住職

私が中国を訪れたのはあの文化大革命が中国全土に起りつつあった以前の昭和三十九年(一九六四)八月のことであった。

日朝協会全国代表十三名と共に、朝鮮民主主義人民共和国解放十九周年八・一五慶祝記念日に朝鮮対外文化協会の招きで平壤におもむいた時のことであるから、今から丁度十五年前の事であった。

勿論その頃のパスポートは香港行きの査証しか貰えなかったのである。

九竜から深圳―広州―武漢―鄭州―北京經由で平壤入りまで一週間を要した事を記憶している。

同年九月初旬帰途、安東―瀋陽を經由し、国際列車で北京まで約二十四時間かかった。

当時西園寺公一先生が北京におられて諸種便宜を計らっていただき、一週間北京の各所を見学させていただいた。八達嶺に行くのにも現在のような立派な列車でなく居庸関を通過して車での強行軍である。

滞在中、中日友好協会の廖承志先生、張香山先生の中ソ対立、アジアの状況をめぐる諸問題について長時間に亘りお話しを覗く機会を得た。

どうしても日本との平和友好、国交の回復が急務であるとの熱のこもったお話しに大いに感動をおぼえ、その時の先生のお話しと今現在の中国の外交方針が一貫して変わっておらないことを今にして思うのである。

時恰も天安門前の広場ではベトナム支援、米帝国侵略主義のアジアからの追放を叫んでの大デモ行進が行わ

れ、北京市内は緊迫した熱氣と新中国の社会主義的建設の意気にみちみちていた。

(一) 始めて広済寺を訪れる

団員の内私一人仏教徒であり、寺院の住職なので是非仏教寺院を訪問させていただきたい旨申し出た。

そして「社会主義体制下にある中国の仏教事情と、マルクス・レーニン主義と宗教のかかわりを中国僧侶の人はどの様に受けとめているかを話合って見たい」と私なりの心の矛盾を率直に訴えた。

心よく私の申し入れを受けてくれ、工作員通訳の方と二人で北海公園のそばにあるという中国仏教協会の本部がある寺院に案内して貰えることになった。

午後の休憩時間を利用しての訪問であるのに静寂な境内は綺麗に掃き清められ、蟬の音色も涼しく森閑とした表門に居士の方(当時の国会議員)と住職明真法師お二人の出迎えを受けた。今にして思えば北京を訪れる仏教関係者が必らず表敬訪問をする広済寺であった。(筆者は其後三回訪問す)

まづ住職の先導で早速諸堂を御案内していただいた。

大雄殿にはあらかじめ大薰香がたてられて、白檀の香煙けぶる本尊(釈迦牟尼仏、左弥勒、右迦葉)前に心経一巻を誦し、日中戦争犠牲愛国烈士の霊に對し懇親平等、日中平和祈願の御回願を捧げ、次いで円通殿、多宝殿舍利閣、図書室、研究所を見学した。

応接室に案内され突然訪問のおわびと型通りの御挨拶を申しあげたのである。

茶菓の接待を受けている中に、籠に一杯とりたての葡萄がさし出された。寺の菜園畑で出来たものだそうだ。

1 解放後の中国の寺院は毛沢東主席の賢明なる指導の下に、政府の力で寺院の復旧整備が着々となされていること

2 町や村に從來あった礼拝所、廟宇等は託児所、学校、工芸所、博物館等に解放され社会主義建設に役立っていること

3 信教の自由は憲法の上でみとめられ、解放前は荒れ放題で衣食住さえ得られなかったが、今では仏法の教えの通り「一日為さざれば一日食さず」と作務、つまり労働を通して、「人民に奉仕する」精神で戒行に励むことが出来ること

4 世界原水大会に中国代表の一人として日本を訪問し
増上寺椎尾長老には大変世話になったこと

等々を、私が質問する前に、中国仏教の現状についてお話しして下さった。勢いこんで案内を乞うた若輩者の私の不明を心にわびながら早々に広済寺をあとにしたのである。帰り際に「中国仏教」なる対外文化協会と中国仏教会の編集になる二冊のパンフレットと白檀の念珠を頂戴した。そのパンフレットの中を見ると、文字は解らないが今は亡き浄土宗の先師伝通院大河内隆弘先生御夫妻の写真、浅草のなつめ寺の菅原惠慶先生の写真がのっており交城県玄中寺での戦前戦後を通じてのお念仏の交流が書かれてあったのである。後でわかったのであるが、戦後いち早く日本における中国人犠牲者の烈士遺首送還の事実等を通じ、又東京を中心として日中友好宗教懇話会を結成され、並々ならぬ御苦勞の中に日中友好のかけ橋として尽力して下さった諸先輩老師に、深く感謝を申しあげる次第である。

(二) 日中友好浄土宗協会設立のこと

私は昭和三十六年より三期十二年高崎市議會議員とし

て北方自治にたづさわり、かたわら群馬県日朝協会、日中友好（正統）協会の役員として両国の平和友好親善運動にたづさわっていたことがある。

昭和四十七年九月（一九七二）北京において、田中元首相が訪中、周恩来首相との間で待望の「日中共同声明」が調印され、この国交回復により長い不正常化時代の幕を閉じ「新しい一頁」が開かれたのである。

私は浄土宗として一宗あげて革命以後の中国を正しく理解し、日中友好の運動に仏教各界の先頭に立って積極的に押し進めるべきであるとかねてより痛感しておったのである。

それが曇鸞、道綽、善導等中国浄土教の各視野から受けた広大な慈恩に酬いることであり、祖徳の顕彰と報恩感謝の誠を捧げる道であり、五濁惡世の現代に念仏を生かし、『人と処と時』を得て願共往生を唱えられた善導大師一三〇〇年の道に通ずると確心している者である。

昭和四十八年九月の頃だったと思う。私は学兄の中島真哉師と共に、当時宗教者懇話会の会長であった大河内先生を訪ねた。

先生は大変お喜びになり早速神田錦町にある日中友好

協会全国本部に赤津益造先生を訪れ、色々と協会設立の事柄につき御指導を受けたのである。その後、今は亡き松本大俊師と共に宗務総長稲岡寛順師のもとに同道した次第である。

総長は、善導大師を高祖と仰ぐ浄土宗七、三〇〇カ寺五〇〇万信徒あげての友好運動を進めることに大いに賛同して下さった。しかしながら色々の宗内事情で仲々具体的に進まなかった。昭和四十七年、既に京都では西安と姉妹都市を結んだのを機縁に、仏教精神に則り日中友好を進め、世界の平和に寄与する目的で日中友好仏教協会が塚本善隆先生を会表に各宗派一致しての友好運動が進められていた。昭和五十年私が宗会議員となり、時恰も昭和五十五年「高祖善導大師一三〇〇年遠忌」を迎えるにあたり遠忌局が設置されたのを機に記念準備を行う計画が進められ、その結縁が正に熟して、念願であった「日中友好浄土宗協会」が昭和五十二年九月に他宗門にさがけて設立される運びとなったのである。

(三) 善導大師遠忌の聖縁を

世々代々の日中友好に

このようにして、昭和五十三年四月には趙樸初先生を団長とする仏教友好訪日団をお迎えすることが出来たのである。そして、その第十月に、浄土宗代表団（二十名）を中国に正式に招待するとの朗報をおもちになられたのである。

浄土宗各界を代表とする代表団は塚本先生を顧問に、稲岡総長を団長として北京、太原、西安、洛陽と各都市の善導大師ゆかりの地を訪問され非常な成果をおさめて帰国された。

かくして、本年五月には「日中友好、浄土宗の翼」訪中団九十三名を派遣することが出来た。

訪中団は善導大師が修業された山西省交城県の玄中寺に参拝し、続いて陝西省西安市の南郊、神禾丘陵にある香積寺の十三重崇霊善導大師墓塔（公歴六八一年、唐代建立）前にぬかづいて、宗祖法然上人と高祖善導大師の間に結ばれた尊い信仰の絆と誼をしみじみと回顧し、その感涙を今日に再現して、日中友好永遠の平和・友好の為に尽すことを誓い合ったのである。

〈随想〉

ほとけとの出会い (四)

佐さ 竹たけ 隆りゅう 三ぞう

(大正大学教授・医博)



増谷文雄著『仏教概論』(筑摩書房刊「現代人の仏教」第十二卷)は、ほとけとの出会いの契機となったという意味で、わたくしにとって忘れがたい座右の書であります。その後何回か読み返す機会がありました。その度毎に新しい感動を覚え、仏教に対する理解が少しずつ深まってきたように思われます。この良書に邂逅した機縁それ自体が、わたくしにとっては、「ほとけからの呼びかけ」であり、「仏の導き」であるように思われてなりません。

癌研究所付属病院を退院したわたくしは、一言お礼の言葉を述べたく思い、大正大学の宗教学研究室に増谷文雄先生を訪ねました。

一面識もないわたくしのような者が突然お訪ねして、はたしてお目にかかれるかどうかはなほは心もとないことでしたが、勇を鼓して五分間の面会をお願いしたところ、講義中であつたにもかかわらずこころよく会って下さいました。カウンセリング研究所非常勤講師という当時のわたくしの肩書がおそらく役に立ったのではないでしょう。

二年後に大正大学教授の末席をけがすようになるとは、その頃夢にも思いませんでした。人間の運命というものはまことに不思議なものです。

増谷先生にはじめてお目にかかった時の印象は、わたくしの専門領域の恩師リポート・ソンデイ(ハ

ソガリーの精神医学者、家族的無意識の発見と運命分析学の創始者として有名、現在スイス、チューリッヒに在住）博士の場合のそれと似ており、大きな感銘を受けました。

豊かな教養と知性がにじみでている温容、かがやくような銀髪、時としてきびしい眼光と光彩をともなうやさしいおだやかなまなざし、悲痛と苦悩ののりこえたしるしをおもわせる額にぎざまれた皺、生きいきとした談話、友情にみちた解放的な態度——それらはすべてわたくしを魅了しました。

つまり、一言で簡潔に表現するならば、長い人生経験と生活の輝きが——本人自身の抑制にもかかわらず——举措・動作にはつきりと認められました。

先生の著書のおかげで「癌ノイロ、ゼ」の苦境から脱却できたこと、そして何よりもまず第一に、仏教に対する今までの誤解を完全に解消して真の意味で「ほ、とけと出会ふ」ことができたことへのお礼を述べ、講義を中断したことに對する非礼をお詫びしてお別れしました。

その時の先生のお言葉のなかで、忘れることので

きない重要な発言がありますが、それを次に述べるような先生の卒直なお言葉であります。

「貴方はわたくしの本を大変正しく読んで、正しく理解して下さって、有難いことだと思えます。わたくしの主張や意図が、実は非常に残念なことには、必ずしも同業者である仏教学者達に理解されなくて困っているんですよ。」

ちょっぴり淋しそうな表情で、苦笑まじりの口調で、先生に對する仏教学界の評価の正しくないことへの不満（先生自身はどうお考えになっていたかはわかりませんが、不満なしフラストレーションと考えたのはわたくしの感情移入による表現で、あるいは正しくないかもしれませんが）をもらされたこの一言は、不思議にいつも記憶に鮮烈であります。

門外漢の素人のわたくしがこんなことを言うのはあるいは妥当でないかもしれませんが、先生の所説が仏教学界で正当な評価を受けることなく、一般に認められないとは理解しがたいことです。

増谷文雄先生の『仏教概論』は、わたくしの理解した限りでは、次に述べるような三つの特色があるように思われます。

(一) ブッダの思想と実践の体系が仏教の原流として叙述されているにとどまらず、仏教史の整理のための原理が与えられていること。

(二) 東西思想の対面の場合において、「大いなる対話」の中で仏教を論ずるという現代の思想的状況が要請する現代的な課題に答えていること。

(三) 「現代人の仏教」と題したシリーズの最終巻にふさわしい、他の十一巻の紐帯として、体系づけの役割を果たしていること。しかも過去の教相判釈を止揚して、仏教の基本的問題をつねにヨーロッパ精神との対審という新しい観点から捉えていること。

このような「仏教概論」が過去にあったかどうかは知りませんが、わたくしにはこの書は画期的な力作であるように思われます。やさしい表現で述べら

れています。内容は学問的水準の高い最高級、第一級の良書であると信じます。

偶然入手したとは言え、わたくしが最初に親しんだ仏教書がこの書であり、このような良書に幸運にも出会ったことはまことに有難いことで、度々繰返すようですが、「ほとけの導き」というか、「仏からのわたくしへの語りかけ」のように思われてなりません。

昭和四十一年四月より二年間大正大学カウンセリング研究所非常勤講師として、精神医学（精神病理学を含む）、精神療法（治療教育学を含む）、深層心理学（とくにリポート・ソンデイの運命分析学）等の講義を担当しましたが、同四十三年八月一日付で、まことに不思議な機縁でわたくしは大正大学教授として迎えられました。これについては、社会学の柏熊教授、前学長の中村康隆名誉教授の両先生の御尽力と御好意によるもので、つねづね感謝しておりますが、月日のたつのは早いもので、大正大学にきてからすでに十一年を経過しました。

「ほとけとの出会い」のきっかけとなったのは、さきにも述べたように増谷文雄先生の著書『仏教概論』ですが、わたくしの心のなかに定着し、それがゆるぎないものとして確立されるにはさらに時間を必要としたようで、次に述べる二人の先生との人間的交流の結果であり、その意味でわたくしの人生の師として、この両先生にはいつも尊敬と感謝の念を捧げております。

二人の先生とは、壬生台舜教授（仏教学）と竹中信常教授（宗教学）であります。壬生先生は仏教学部の方であり、適切な助言と文献を紹介して頂き有難いことだと思えます。また竹中先生は、教授会でのわたくしの数々の非礼や不遜な言動にもかかわらず、つねに好意と友情を寄せて頂き、懇切なアドヴァイスを頂き、感謝の言葉もありません。

壬生教授との最初の出合いは、教授会で偶然隣の席に坐り、話し合うことから始まったように記憶しております。壬生先生についての第一印象は、一言で言うならば、論旨が明快で発言の内容が良く理

解で、活動的、積極的な全般的態度とともに、頭脳のシャープな魅力的な人というイメージが強烈でした。あまり論理的でなく、アンビヴァレントな発言の多いなかで、壬生先生の明快な論理性はひときわ目立ち、さわやかな風が沈滞した教授会の空気を吹きぬけるような感じでした。

先生に対する最初の質問は、ウバニシャッドについてであったかと思いますが、ソンデイの「自我分析」の中に出てきたアートマン、ブラフマンの意義についての素朴な問いであったと思います。

先生は素人のわたくしにも理解できるように親切に解説して下さい上で、『自我と無我——インド思想と仏教の根本問題』（平楽寺書店刊、中村元編）という本を読むように指示されました。

この『自我と無我』という良書との出会いは、わたくしにとって、仏教の理解における飛躍的發展を与えたという意味で、まさに記念碑的な存在とも言うべきものであります。これに関連してわたくしが仏教に魅了されてゆく過程については、次号に詳しく述べたいと思います。

（つづく）

「人生の糧」に想う



たから
だ まさ
みち
宝田正道

(浄土宗出版事業協会主幹)

■「心の糧」を食べよう

秋を修飾する言葉として、昔から、芸術、読書、思索スポーツ、味覚などが使われている。考えてみると、これらの語句に共通していえることは、いずれも心や身体への鍛錬ないし保持を意味する内容をもっている、ということである。つまり、秋は健康の糧を仕入れる季節ということがある、いみじくもこれらの語句の中に秘められていることが知られる。

「読書の秋」一つを取上げてみても、天高く馬肥える爽涼の時、夜は長いし空気が澄んで、灯下親しむべき絶好のお膳立てができているからこそ、楽しく、効率よく「心の糧」を得ることができるのであろう。もりもりと食べるがよい。

そういえば、作家の人たちも心得ていて、読書の形容に、飲み食いの字句をあてがっている場合が多い。例えば、石坂洋次郎は「記事を片隅からがりがり物を噛むような調子で」(『若い人』)といい、小林多喜二は「豆粒でも拾うように、ポツリ、ポツリ、しかしむさぼるように」

『蟹工船』といい、堀辰雄は「空腹者のようにがつがつと」『麦藁帽子』といい、森田たまは「こくこくと搾りたての牛乳を飲むように」『もめん随筆』といっている。いずれも、詩や小説や手紙を読む時の形容句であるが、いろいろな表現があり、それもみんな飲み食いに関係のある言い方をしているところが、おもしろい。やはり読書は健全な生活を送るための「心の糧」なんだなあ、とつくづく考えさせられる。

■古人の書がよい

兼好法師は、『徒然草』の中で、

ひとり燈のもとに文をひろげて、みぬ世の人を友と
するぞ、こよなう慰むわざなる

といっている。ここでは「みぬ世の人を友とする」、つまり、もう会えない故人や、まだ面識のない人々と、書物を通じてこそ、楽しく友人づきあいができる、と喜んでいるのである。これはまた、イギリスの哲学者コリア

ーが、

吾人もし社会に出でて、生者に交際するに倦かば、
退いて書籍に面して死者を訪問せよ。死者はその交
際對話中に毫も傲慢の色を顯わすことなく、城府を
設くることなきなり

といった趣旨と同じく、古人の書に親しみ、死者の残した糧によって生かされる喜びを語ったものであろう。厨川白村は「むしろ古人の書を読め、それは自分が世間よりも遙かに離れ、遙かに進み得る最良の法である」『オビテル・スクリプタ』といったが、兼好も遁世者・世捨人の一人として、古人の書に「人生の糧」を求めたことがわかるのである。

どういう種類の書を、どういう態度で読むのが一番身心のためになるのだろうか。三木清は、「新しい感覚をもち新しい問題をもって対するものでなければ古典も生きてこないであろう」とし、「自分で思索しながら読むということは単に批判的に読むということにのみ止まらな
いで、発見的に読むということではなければならない」『読

書と人生」といっている。ただ漠然と文字面をなでるのではなく、一字一句に問題意識を投げかけながら、何かを発見するつもりで読むことが大切だ、というのである。

■法然上人の読み方

法然上人は、周知のとおり、大の読書家であった。どんな大巻の書であっても、三辺読み返せばほとんど覚えてしまふ、というほど博覧強記であった上に、一日として聖教を手放したことがない、という好學の人であった。

ただ、木曾義仲が都へ乱入してきた日、つまり寿永二年七月二十八日の一日だけは、どうしても落着いて書物を読むことができなかった、と自ら述懐されているように、ひねもす読書三昧に明け暮れたわけである。そしてとうとう一切経を繙くこと五返、一日六、七万遍の称名相続をするという大難行を、あえて完遂されたのである。しかも、出離の文証を得たい一心で、特に『往生要集』や『観経疏』については、文字どおり一字一句、いわゆる「眼光紙背に透る」ほど心魂を傾け、発掘意識を

充溢させつつ読まれたに違いない。だからこそ、「往生之業念仏為本」や「一心専念弥陀名号」の文字に出離の要道を掴みとる端緒を見出せたのである。それにしても、われわれの想像を絶する渾身の大努力であったろうと思う。さすがに智慧第一、勢至応現といわれるにふさわしい読み方である、と感心する。

■昔と今の損得

昔は独り人里離れた山中の庵に籠って、静かに風月を友とする読書三昧に徹することが、人生最大の幸福の一つであり、またその理想を実現するに足る環境に恵まれてもいた。今のようにテレビや電話の邪魔もなく、人づきあいに時を奪われる煩いもない。その代り、読むことより、むしろ書いたり写したりすることに手間がかかったことだろうと思う。善導大師は、『観経疏』の中に、「字一句も加減すべからず。写さんと欲する者は一に経法のごとくにすべし」といわれているから、法然上人も、それだけを忠実に守ることに、むしろすこぶる神経をすりへらす結果となったのではなからうか。

したがって、弟子たちも、例えば師説の『選択集』を写すのに、どれだけ骨身を削る思いをしたか、その苦勞が察しられる。「汝は法器であるからこれを授ける」といわながら、聖光にしても隆寛にしても親鸞にしても、そのまま譲ってもらったのではなく、書き写す資格を与えられたにすぎないのだから、それこそ一字一句不可加減で淨書に励んだわけである。時間をかけ、精神をこめて、一字三札の作業を続けた涙ぐまさが、尊く偲ばれる。

話は近代になるが、幕末の頃、勝海舟はある人の秘蔵しているオランダの兵学書を読みたくて、門外不出のその本を写すべく、何日かの間、毎日その家に通ってこれをコピーしたという話がある。

一冊の書を自分のものにするために、昔の人はどんなに苦勞したか、これでもわかるが、現代はどうだろう。汗牛充棟もただならぬ本の洪水で、そのつもりになればどんな書物でも簡単に手に入れられる。種類も豊富で、ほとんど何でも揃っている。複写の器械も普及して、誤字の危険もなく、アツという間に原本どおりのコピーができあがる。便利で贅沢な世の中になったものだ。

しかし、おかげで人はだんだん文字離れがひどくなつた一字一仏の尊さを忘れ、読み書きの能力もとみに低下しつつある。はたして、昔の人のように汗水たらして長時間苦勞の末、得たものと、楽をした代りに失つたものと、その利害得失いずれにありや、軽々には論じられないにしても、どうやら失つたもののほうが大きい気がしてならない。

■忘れえぬ思い出

読書についての随想を求められて、思いつくままに雑然たる駄文を綴ってきたが、与えられた紙数は早くも尽きようとして、最後に生涯忘れられぬ感激となったエピソードを一つ。

戦時中、私は例の赤紙に召されて大正大学の教壇から遠く南方戦線に派遣された。スマトラ、仏印、タイと転戦して、昭和十九年の秋、バンコク近郊の原野で梱包監視の任務についた頃の話である。いわゆる弾丸雨飛の第一線ではなく、どちらかというと日夜平穩で警備の必要もないほど閑（さむ）な毎日、兵隊たちはむしろのんびりと露営

の夢を楽しみ、そぞろ郷愁のさ中にあった。みんな内地からの音信や活字に飢えて、たとえ古新聞の切れっぱしにさえとびつく毎日であった。

そんなある日、私は内地から一個の部厚い小包を受取った。紛れもなく、恩師望月信亨先生の弥生夫人の筆跡である。胸躍らせて紐をほどく手ももどかしく開いてみると、なんと出征前に寄稿しておいた私の小論が掲載されている『望月仏教文化研究所紀要』第一輯であった。

およそ学問とは縁遠い戦塵の巷で手にした固い学術論文集。場所といい内容といい、全く奇妙な取合せであったが、私はそれこそむさぼるように読破した。戦友たちもチンパンカンパンの活字群に、期待外れの面持ながら、それでもしきりに内容を知りたがった。私は二、三の論文をかみくだいて話してやりたりした。

思えば、なんというありがたさ！ 活字の飢えを満たしたことはもとよりだが、それよりも何千キロを隔てた戦地へわざわざ送本して下さった先生ご夫妻の厚意と恩情は、何にもまして私の心を打った。私はこの本だけでも死んでも離すまいと、背囊の底深く秘めて、とうとう二年後の復員時まで収蔵、無事内地へ持帰った。この時

の感激はいつまでも忘れられない。

こんな漢詩がある（真宗皇帝勸学）。

家を富まさんとすれば良田をかうことを用いざれ、
書中自ら千金の粟あり

居を安んぜんとなれば高堂に架するを用いざれ、書
中自ら黄金の屋あり

門を出するに良媒なきことを恨むなかれ、書中女あ
り顔玉のごとし

男児平生の志を遂げんと欲せば、六経勤めて窓前に
向って読め

読書の醍醐味、まさに、この言に尽きる、というべきか。食も居も女もみんな不自由をかこつ軍陣の一隅にあつて私は、はからずも一冊の恩師の書中からそれらを発見した思いで、読書の機会のあるごとに、その喜びを想い返すのである。

■六時礼讃の「無常偈」に生きる■

— 晨朝 無常偈 —

— 七 —

やす い こう ざん
安居香山

(大正大学教授・文博)

秋は一入、無常を感じしめます。澄んだ月、そして短い生命を、泣きつづける虫達の声。その生命の短かさを知ってか、知らないでか、余りにもその音色は美しいことと限りがありません。そんな時、静かに筆をとっているとき、つくづくと今生かされている喜びを味わい、そして支えられた吾が生命を、大切に意義深く生きねばと、私なりに考えているところです。

さて、「無常偈」も、今回はいよいよ晨期に入ることになりました。朝まだき、太陽は未だ登らず、かすかに朝の光が戸障子を通して、明るさを増してくる静かな一時、晨朝礼讃を唱え終って、「晨朝無常偈」に移ることになります。

ところで、今まで見てきましたように、これまでの「無常偈」は、人生の無事を説くこと極めてはげしく、時には身の毛もような譬えて、その実相が説かれました。そして、善導大師は、そうした現実に向面しているわれわれを叱咤しつつ、自策自励することをすすめられたのでありました。

ところが、「晨朝無常偈」は一転して、無常の事実を自覚したものに、これからの在るべき道を簡潔にさとされることとなります。音楽のリズムが、荒波のように最高調に達した極点で、一転して静寂の海に帰ったようです。それは、静かな朝のしじまの中で、唱え奉るのによさわしい内容になっているように思われます。

まづ、その文を拝読し、和訳を見てみることにいたします。

欲求寂滅楽 寂滅の樂を求めんと欲すれば

当学沙門法 まさに沙門の法を学ぶべし

衣食支身命 衣食は身命を支うのみ

精進隨衆得 精進衆に随うべし

僅かにこの四句のみであります。いまこれを、大木惇

夫氏の和訳によりますと、次のようになります。

寂滅の樂もとむれば

沙門の法を学ぶべし、

衣食はいのち保つのみ、

得られしままを戴かん。

前に述べましたように「日没無常偈」では、「自策自勵して常住を求む」と申され、「初夜無常偈」では「心を攝して常に禪におきたまえ」と申されておりました。この「常住」といい、「禪」とされるものが、ここにいう「寂滅」の境といわれるものと、同じものでありましょう。生とか死とかいう捉われの心を抜けて、無為自然の中で生きる、悟りの世界とも、いうべきものでしょうか。涅槃という仏教でよく用いられる語の訳語と

されています。

ともかく、そうした境地に達するためには、み仏の説かれた教えを、心して学ぶことが大切でありましょう。自から学ぶことができないならば、教えてもらうことが必要でしょう。私達は、なかなか自分が学ぶということは難しいものです。努力はしなければならぬでしょうが、一朝一夕にかなうものではありません。こんな時は、心を空しくして、師を求めるのが早道です。善知識にすることが、近道です。法然上人も、しばしば、愚鈍の身になって、み仏の教えを信じて、念仏を申せとお教えになりました。ごさかしい知恵を持つわれわれは、なかなか愚鈍になり切れませんが、半かじりの知恵などで、寂滅の境に到りうるものではないと思われまふ。

ところで、こうした寂滅の境に到り着くためには、いろいろな方途がある筈です。その一つを、ここでは分りやすく説明されています。それは、「足るを知る」ということであるようです。衣食は、身命を支えるに足るだけのものがあつたらそれが充分だという自覚があります。したがって、あれが欲しい、これが食べたいなど、身分不相応な欲をださないで、「精進」即ち、よいもの

も悪いものも、ただ支えられ、得られるもので、満足することが寂滅への道であると、さとされているのであります。

確かに私達は、毎日、欲のおもむくままに、あれを求め、これを求めて東奔西走しています。そのことにどれだけの精神を消耗し、どれだけの肉体を苦しめていることでしょうか。そして、心は常に不安におののきつつ時の過ぎさるのも忘れてしまうというのが、現状であります。

中国の老子も、次のようなことをいっています。

「禍は足ることを知らないより大きいことはなく、咎は得ることを欲するより大きいことはない」

要するに、いろいろなわざわいは、足ることを知らないことから起り、自分のものにしたいという欲望から起ってくるものだということです。従って、老子は自然のあるがままに生きることを、最も尊いことだとし、道に叶った人の在り方だと教えました。

勿論、私達には、いろいろな欲望（仏教では大きくは五欲と言っています）があり、これを満たそうと、右往左往しています。確かにこうした欲は捨てなければと思いな

がら、なかなか口にするほどた易いことではありません。それだけに、これが為し得られる人は、自から寂滅の境に達しえられる人でしょう。

先頃も、名古屋の老人夫婦がボンと六億円を名古屋市に寄附して、人びとを驚かせました。老人の言い分では、「大金を子供達に残しても、ろくなことがない。そうかと言って、持って行けるものでないので、社会の為に寄附する」というのです。これなども、欲の皮でつっぱっている人には、できないことでしょう。私など大いに感心させられました。

とも角、このように、善導大師は、この「無常偈」を取りあげることによって、静かな朝の指針とされました。この無常の偈は大師の独作ではなく、他の經典からの引用とされていますが、大師がその内容に同感されればこそ、これをここに取りあげられたものと思います。そして、ここでは、無常の何であるかを分った筈のわれわれに、これからの心構えを、静かにお説きになったものと思われまします。それだけにこの「無常偈」は、静寂の朝にふさわしい偈と拝するものであります。

（つづく）

■善導大師の生涯とその教え■

—十—

◇ 『観経疏』—玄義分・序分義— ◇ ◇

○

さきにも述べました通り、善導大師の代表的な著作として『観経疏』があげられますが、この『観経』の注釈書は、かならずしも善導大師がはじめてではありません。中国では慧遠、智顗、吉蔵など有名な高僧学者によって『観経』の解釈がなされていますが、それは自力聖道門の立場であって、『観経』の真髓が理解されていたといえませんが、善導大師こそこの経の本来のもつ正しい意を他力淨土の立場より解釈された人なのであります。奥書の文には、「いま、この観経の要義を出して古今を楷定せんと欲す」と書いてあり、最後に「この義すでに証を請い定めおわんぬ。一字一句も加減すべからず。

写さんと欲するものは、一に経法のごとくすべし」とされています。このゆえに昔から、古今楷定の妙釈といわれ、「玄義分」「序分義」「定善義」「散善義」の四帖から成り立っているところから、「四帖疏」ともいわれて大切にされているのであります。

これからその大要について述べてみようと思います。

○

まず最初に「玄義分」ですが、これは、『観経』の幽玄な意義を明かす部分という意味です。一番はじめに、

「まず大衆を勧めて願を發して三宝に帰せしむ」

と示された「帰三宝偈」の文があります。この偈は十四行で五言五十六句から成り立っているところから、「十四行偈」ともいわれますが、はじめに自力の菩提心に対して、選んで他力の金剛心を示して、弥陀に帰依するよう到大衆にすすめられています。

「道俗時衆等、おのおの無上心をおこせども、生死甚だ厭いといがたく、仏法また欣よろこみがたし。ともに金剛の志をおこして横に四流を超越せよ、弥陀界に願入して、帰依し合掌し礼したてまつれ」

つぎに善導大師は、みずから三宝に帰敬せられるすがたを述べて「世尊われ一心に」といわれていますが、これは、世親が『浄土論』に用いている言葉です。仏、菩薩に冥加を請い、さらに『観経疏』を造るにあたっての理由として、釈迦、弥陀二尊の教えに遇うことのよるこびを述べておられます。

「われら愚痴の身、曠劫よりこのかた、流転して、い

ま釈迦仏の末法の遺跡、弥陀の本誓願と極楽の要門とに逢えり」

わたしたちは、大師が「われら愚痴の身」と謙虚に自らをみつめておられるすがたに深い人間性を偲ぶのであります。さらに願生の心を明かして「定散等しく廻向すれば、すみやかに無生身を証す」といわれています。また「いま二尊の教えに乗じて広く浄土門を聞かん」といつておられますが、ここに『観経疏』を造られた精神がこめられており、自行化他の熱情があふれております。

○
「玄義分」では、一、序題門、二、釈名門、三、宗旨門、四、説人門、五、定散門、六、和会門、七、得忍門の七門を立てています。

第一の序題門には、まず釈尊が仏教を開かれたゆえんが明かされ、イダイケ夫人を通じて他力浄土の教えが述べられ「娑婆の化主は、その請いによるがゆえに、すなわち広く浄土の要門を開き、安楽の能人は別意の弘願を

顯彰す」としていられます。

要門とは、『観経』に示されている定散二善の行を実践して浄土に往生するということであり、弘願とは、すべての善惡の凡夫が往生するために、みな阿弥陀如来の大本願の業力を増上縁とすることでであると説かれています。

釈尊が要門を説き、阿弥陀如来が弘願をあらわした理由は、釈尊はこの地より行けとつかわし、弥陀はかの国より来たと迎えられ、いわゆる二尊一致されて、わたしたちを導かれるというのであります。

第二の積名門は『仏説無量壽観経』の経題を積するのでありますが、なかでも「観とは照なり」と釈して、「常に淨信心の手をもって智慧の輝きを持してかの弥陀依正などのことを照す」として定善の観法もお念仏の力によってあらわれることを述べられています。

第三の宗旨門には、この『観経』には、観仏と念仏の両宗のあることを述べ、一心に廻願して浄土に往生することが体であり、『観経』は即座に往生することのできる頓教の撰であることを明しています。

第四の説人門には、『観経』は仏の自説であって、王

舎城のビンビサーラ王の王宮において、イダイケ夫人らのために説かれたことを示しています。

第五の定散門には、いかなるものも、仏の願力に乗じて往生しないものはないことが明きらかにされ、定散二門を釈して、古師の解釈を破しております。

第六の和会經論門には、弥陀の浄土は報土であって、化土でないということを明きらかにして、凡夫はすべて弥陀の本願力に乗じて報土に往生することを示しています。

第七の得忍門は、イダイケ夫人の弥陀のお救いによるご利益のことをくわしく述べ、最後に、「この義おわって三たび前証を呈するものなり」といわれて証明がしられています。



「序分義」は、『観経』の序分にあたる文句を積するのでありますが、従来『観経』の注釈は、序分、正宗分、流通分の三分説にわけられていましたが、善導大師は、五門にわけておられます。すなわち一に序分、二に正宗分、三に得益分、四に流通分、これを王宮会と著闡

会にわけて、この五門分別のことを述べ、その序分を積するのが序分義であります。この序分について、二序七縁、三序六縁の二つの立場がありますが、いま一々について簡単に述べてみましょう。

第一の化前序とは『観経』が説かれるまでのことで、『観経』が王舎城のイダイケ夫人などのために説かれる前、耆舍崛山にあって説法されていたことをはじめに述べています。

第二の禁父縁とは、アジャセ太子が父のビンピサーラ王を監禁した因縁について説かれているのであります。みずからの子のために出禁された父王に、イダイケ夫人がひそかに食をささげること、父王が幽閉されることによって仏に請法を請いねがったことなどが述べられています。

第三の禁母縁とは、アジャセ太子の母イダイケ夫人をも幽閉した因縁について述べているのでありますが、アジャセ太子はイダイケ夫人が父王に食をおくり、沙門が説法するのを聞いて、大いに怒り母を殺そうとしたことなどについてであります。

第四の厭苦縁とは、イダイケ夫人がアジャセ太子に幽

禁されて、娑婆世界の苦しみを厭われた因縁のことです。

第五の欣浄縁とは、イダイケ夫人が苦しみにさいなまれながら、憂悩のすえ浄土のねがわれた因縁が明かされています。

第六の散善顯行縁とは、散善をひこおさんがために、三福すなわち、世福、戒福、行福の実践をすすめあわす縁を説いています。

第七に定善示観縁とは、イダイケ夫人は実の凡夫であること、西方に想いをこらして浄土の莊嚴を観ることができること、仏力の利益を得ることなど、定善十三観を示すための手だてを明きらかにしておられます。

このように「序分義」には、『観経』の救済の対象となっている濁悪の凡夫について示されているのであります。それはまさに心想羸劣のイダイケ夫人と、濁悪不善の凡夫を明かすことによって、機の真実について述べているといえましょう。

(宮林昭彦)

創作

石 疊

渋谷賢 庵

○

正徳二年さみだれのころ、善光寺山門の下に一人の男が立っていた。身なりは一見商人風であったが、口をへの字にまげて立つ姿は居丈高く、乱れた鬚よりたれ下る鬘のほつれをかき上げる風もなく、ただ眼前に聳え立つ本堂の大伽藍、その唐破風のついた装こしより音もなく落ちる雨だれの銀の糸を見入っているのである。

両がわに立ち並ぶ仲見世の間を、真すぐにぬける参道も、もう半月余りも降りつづいた梅雨に泥沼のような姿となり、たまに通る巡礼の草鞋も足袋も脚絆も泥にまみれている。そんな様子もこの男の眼には入っていない。ただ檜皮の屋根をはなれた雨だれの垂直に落ちる銀の糸をのみ見入っているのである。

この男は名を大竹屋平兵衛と言った。江戸は中橋上横町大竹屋の主人である。飛ぶ鳥も落す大店の主人なのである。

この男の今ここに立つにはそれだけのわけがある。あの時の光景が、夜も昼も、平兵衛の脳中にしみついてはなれないのである。

今も男の脳裏にはまたその妄想がおそいかかっていた。

その夜も雨であった。

俺は三カ月も前より不審に思っていた。

たしかに前日数えておいた銭箱の金子が、二百、三百とぬかれているのである。

これは誰ぞが盗みをはたらいていると思うより思いうるがなかった。しかも無くなる金子はだんだんその量を増していった。

俺は家の者には語らなかった。このような手口は家の者より外にできるはずがなかった。番頭か、丁稚か、手代か、出入りの者か、ともあれ腹が立つ、飼犬に手をかまれろとはこのことをいうのか、

俺はこの賊を取り押えることを考えた。そして毎夜、子の刻ごろになると独り納戸にひそんだ。

来ればとらえるか突くか、たかがこそ泥に槍を持ち出すなど大人気ないとも思ったが、不心得ものを手痛く折檻するにはいい思いつきだと思った。

今にして思えば、商人のくせに、槍などたしなむべきではなかった。大店を切りまわしていくには槍の一つも心得ないようであると思取って習ったのが怪我のもとであった。

ひそんで泥棒を待つ気持は異様であった。はじめのうちに期待するが、ときを経るにしたがって何ごともないことを祈るようになる。胸の動悸が、暗闇の中でどくどくと鳴る。その夜もどうか来ないでくれ、たのむから来てくれるな。こうつぶやいて雨音はげしい部屋の片隅に息をひそめたのである。

と、来た。来たのだ。

印半てんをひつかぶっているのが真黒い影が、そっと納戸を開けて銭箱の前にうづくまっていたのである。

俺の胸は早鐘を打った。喉は乾固びていた。思わず槍を握って鞘をはらっていた。

俺はもう常人ではなかった。

突いた。たしかに突いた。

うずくまった黒い塊をめがけて力の限り突いたのである。

塊は「ギヤー」とうめいた。

そして「おとつあん」といってどんと倒れた。その声を聞いたとき、俺は血の気が失せて立ちすくんだ。たしかに俺の悴の声だったのである。

家の者が音を聞きつけて明りを持ってかけつけた。突きささった槍より血しおがふき出しているその姿は、まぎれもなく三年前に勘当した俺の悴であったのである。

俺はなぜ勘当などしたのである。

悴が働かないからといって、それが勘当するほどのことなのだろうか。悴が金を使うからといって、それが勘当にあたいるほどのことだろうか、しかし俺は、自分が自分の力

でこの身代を作ったという誇りがあった。働かない奴は人間とは思わなかった。働かずに金を費うような奴は罪人同様であった。

俺のこの考えは悴をますます放蕩におしやうた。はては吉原に通い、居つづけた。

たまに帰ったとき、俺は家に入れなかった。母親は勘当を許してくれといっただけ泣いた。しかし俺はゆるさなかった。家に入りたかったら性根を直して来いといひ放った。

半年ほど前、悴が殊勝な顔をして裏口から入った。俺は見えて見ぬふりをした。

母親が手をこすりこすり帳場の俺の所に来たのは半ときほどたってからである。

母親のいうのはこうである。あの子がそつと私の所に来ていうには、今度こそ料簡を直す、そして堅気になって店を持ちたい。今一しょに居る女も気だてのいい女で私と世帯を持つといってくれる。どうか五十両程借してくれないか、くれとはいわぬ、必ず返すから親父にたのんでみてくれというんです。私の

へそくりも底をつきやした。なんとか目をつぶって都合してやって下しやんせというのである。そんなことは世間によくある話しよ、二度とこの敷居をまたぐんじあねえと追ひ返した。

追いかえしては見たものの、悔まれて悔まれて、その夜は一睡もできなかった。たしかに俺はあれが真人間になってもどってくればこんなうれしいことはないと思っではいた。家督をゆづつてもいいほどに考えていた。勘当とはいっても元をただせば血のつながった親子だものとは度そう思ったか知れりやあしない。あの時、もう一べんだまされる気で、どうして五十両渡すことができなかったのだろう。考えてみれば俺は昔から、我が子を仕込むことばかり考えて可愛がることを忘れていた。一番可愛いと思っっているはずの俺が、悴の顔を見るとすぐむかつ腹を立てちまう。因果なことだ、前世は敵だったのか。ああ俺は我が手で我が子を殺してしまったのだ、前

に坊さんから五逆罪の話を聞いたことがある。父母僧を殺すことは聞いているが子を殺すとは聞かなかった、これは五逆の罪より重いにちがいない。

悴はどんな罪を犯したというのだろうか。博打、女犯、盗み、俺の罪から見たら軽いもんだ、それに引きかえこの俺は、

そうだ。そう思えばこそこの世の極楽浄土と伝え聞くこの信州の善光寺に来て見たのだ。この大伽藍の中に一光三尊の阿弥陀仏がおわしますと聞く、どんなに罪科深くともお救い下さると聞く、そう思ってお参りもし、昨夜はお籠りもした。しかし心の中はどうしてももうひとつ晴れ晴れとしない。俺の罪はどうしたらつぐなえるというんだろう。

男がそこまで思いつみれとき、目の前の泥んこ道を親子のめくら贅女が通りかかった。親はまったくの盲らしい。子がかばいかばい歩く姿はこの男の目をとらえてはなさなかった。と、親の贅女が足をとられて泥の中にし

やみこんでしまった。肩にかけた三味線が体が動くたびにゆれている。子の贅女は懸命に起しにかかるが親の体はますます泥に沈むばかりである。

男は泥をけ立ててとび出していた。そして親の贅女を抱き上げて山門まで運んだ。きびすをかえしてその足でまた善光寺の寺務所に向って走りだしたのである。

○

それより半年の後、大門の脇に高札が建てられた。それには

寄進 金三百両

但 参道敷石代

江戸 大竹屋平兵衛

とあった。

○

正徳四年九月の或る朝、山門に前の男が立っていた。すがた形は同じであつたが、顔に

は安緒と共に、ある気品を漂わせていた。

仁王門から山門を通じて、長方形の石が七千七百七十七枚整然と並べられていた。あの大竹屋が寄進した金三百両により、善光寺の西にあるごうろ山より切り出した石畳である。

おりしもお朝事の尼公上人の台笠が朝日に映えて色白なお額を赤く染めた。善男子善女人がうづくまる前を、白いお数珠の房がつつとすぎていく。お上人の木靴がコツコツと石畳鳴らして遠ざかる。

男は合掌してそのお姿を見送っていた。

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下されば、幸いです。どうぞ、くれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

|| 新刊紹介 ||

生きる意志

アーノルド・A・ハッチネッカー著 佐藤光兆訳

現代社会の複雑な様相は、ともすれば人間性の軽視へとつながる側面を多くもっている。もう十年以上も前からいわれてきた機械文明の進展は、新しいコンピュータ管理の露骨な社会構造を構築しつつある。

若者の自由奔放な行動も、遅ればせながらに整備されつつある福祉行政の加護をまつ老人の不安も、所詮、加速度的に刻まれて行く現代日本の軌跡には抗（あらが）うことはできない。

こうした時代、すでに先進のアメリカの文明が体験している病果の、その多くは、私たち人間自身の精神世界に食いついて、心と身体を犯してやまないものであるという。極端な情報化社会の促進と、私たち人間が率先して開発してきた先鋭の文明の利器が、この大宇宙大自然の中で生まれ育ってきた生物としての人間を容赦なくおびや

かしているのだという。このような人間社会の状況において、精神医学や心理学などのもつ人間の精神を科学する領分の荷う役割は大きい。もとより、単なるアナライザー、カウンセラーとしての処し方ですませる問題ではないが、ともかく人間自身の心の中に芽ばえ、成長し、そしてあらわに吹き出してきたこの現代の病根を鎮静させ、駆除する方途を模索することは、きわめて重要な課題である。

ところで本書は、現代アメリカを代表する精神医学者ハッチネッカー博士の著わされた画期的な啓蒙書である。博士が体験された精神療法の実践を縦横に踏まえて、不安と苦悩にあえぐ現代人の心的世界へのアプローチを目ざしたものである。ともかく心身の健康と、社会の平和を維持するための根本は、もとより一人一人の人格、人間

性に由来する。その人間としての心の基盤、人間としての正しいあり方を啓蒙させるのが、本書のすぐれた特徴である。訳者が、あえて本書を訳出したゆえんもそこにあるのである。

さて本書の訳者は、もとより浄土念仏信仰に篤い仏教人である。訳者の言葉を借りれば「予防医学の進歩、医療機関の設備の充実等がなされつつある今日、なお社会に必要とされているのは、一般への健康教育である」ということであるが、まさしくそのような視点で、訳者は本書のような、現代精神医学の最新の成果を紹介するかたわら、それを宗教のもつこれからの時代への意義と関わらせて説得しようというものである。『健康への精神身体医学的展望のみならず、人間としてより善く生きる在り方』を標榜しようとする訳者の真摯な姿勢がうかがわれるところである。

興味ある方々のご一読をお勧めしたい。
(発売元)

〒108 東京都港区白金二―七―一九
インターナショナル学術振興会

浄土句集

一田牛畝選

群馬 島津 か寿
供華に剪る桔梗も萩も庭のもの

神奈川 松本せつ子
棚経の僧の後ろに扇風機

福岡 服部 光代
見違へる程すつきりと松手入

福岡 荒牧 還愚

福岡 堀 松月
甚平を着ても和尚は上座へと

評 円く刈込まれるものばかりであるが、

松は一葉つつ丹念に摘まれ手入がすめば
すつきりとすがすがしく気持よい。

花莫盛を客間に敷いて開け放つ

評 花莫盛を敷いて開け放たれた客間は、

広々として坐り心地がよいに違いない。

東京 阪入 等達
明易や典座忙しき櫓がけ

東京 真野よし子

夫に拗ね子に拗ね一人花莫盛に

東京 猪瀬 幸子

評 沢山の人々の朝前に 賄役の典座に忙

しいのである。櫓がけで早朝から仕度。

評 梅雨に入れば何んとなくだるくなる。

そんな時帯締の結び目を固くすれば気も
引き締る思いで、心に張りが出て来る。

夏館師第百人叙勲祝ぐ

東京 栗原やえ子

京都 安藤 寛
蟬逃げし後のしじまの薬師堂

東京 細田 初枝

東京 田中 秀代
共釣の餌ありと書いた鮎の宿

評 作者は京の釈迦堂の隣の薬師寺の住職
であるが、喧しい蟬が逃げた後は、蟻蛾

修行僧煩尖り来し安居かな

東京 新井 新生
館山はへりの飛ぶ街カンナ咲く

福岡 高良 慈風
朝涼に刻を忘れてよき一書

埼玉 住藤 泰子
蟬時雨僧衣の襟の滲みいて

東京 長良木律子
夕闇の花火に浮ぶ浴衣かな

山形 松田 光誓
魔屋の応答もなく草茂る

三重 森 静枝
幼児の指先逃げし絲蜻蛉

東京 中谷 久子
風鈴の目覚めし耳にかすかなる

山形 松田 允子
立葵おんなひとりの住家かな

福岡 上滝津弥音
風鐸のかそけき音や施餓鬼寺

福岡 行正 明弘
大太鼓轟き山笠の勢い発つ

東京 鈴木 葉子
提灯揺れてビールのうまさ宵

福岡 高良 幸代
吹き抜けの御堂涼しき施餓鬼寺

大分 丹羽 難中
甥姪をフェリーに一と日船遊び

東京 小笠原香祥
石苔の色の清しき梅雨の寺

東京 末常てる子
十薬の目にも白く群れる

福岡 前田 秀峰
堂に瀟々詠歌奉納十夜かな

東京 阪入志津枝
擧越しに空に伸びたる立葵

東京 吉原登起子
蔓のびて白く可愛ゆき胡蝶蘭

福岡 権藤みきを
腰衣汗疹の稚児僧ちんまりと

東京 島居 千代
大青田見渡す限り人氣なく

山口 上野 明達
初盆の母に灯を奉る

福岡 釈河野ねはん
土用風堂を吹き抜け涼しさよ

東京 栗原とも子
鈴蘭の花の終りの雨となる

広島 香月てい子
町中の寺にも蟬のしきりなる

一田 牛畝
十夜僧声美しく老ひ給ひ

(う)(そ)(い)(す)

大仏はんにプロポーズ



西^{にし}本^{もと}恒^{つね}夫^お

旅は、いつの時でもたのしいものだ。旅は、訪問した先々で、絶えず新しいものを与えてくれる。それを糧に、また新しい生活が広がり、そして、生きる活力をも与えてくれる。旅は、まことに不思議な、ありがたい代物だ、と常々思っている。

未知の所を訪ねる時は、なお更にこの気持は増してくるし、二度、三度と訪れた所でも、前回とは違った趣で迎えてくれる。それは、季節により、まったく異なった、すまいであり、新しい所を訪れた、という錯覚に陥ることもある。

静物でさえこれであるから、そこに生活する人々との触れ合いから得るものは、より大きなものとなる。平生のくらしとは異って、利害関係のない人とはフランクに

話し合い、付き合うことができるから、自然に本音がでる。なんの心配もないからだ。

私も人後に落ちず、よく旅に出る。出るといっても、仕事に託つけたものが多い。それだけに時間は制限されるが、暇をぬってのひと時だけに、たのしみは倍増されるし、心なごむことが多い。

旅のあらかじめの日程が決まると、仕事の成否は度外視して、まず空き時間をいかに捻出するか、そして、その時間でこなせる範囲の訪問先を、あれやこれやと考えることから始まる。この考える時間も、またたのしいものだ。この場合、予定が多少変更となっても、遣り繰りのできるような計画が肝心。無理をすると、仕事にまで影響を及ぼし、たのしいはずの旅が台無しとなり、心身

ともに疲れてのご帰還となってしまうからだ。

こうした用意周到な旅を心がけている私でも、一切計画を立てず訪れる所がある。京都だ。仕事の関係で、すでに何十回も行っているのです、その折々の空き時間で適当な計画を容易に立てることができるようになったからである。

しかし、交通網の発達で、京都は、東京からでも日帰りができる所となってしまうとおかげで、のんびり旅行とはいかなくなってしまった。早朝出発し、深夜帰京が当然となり、旅の風情は、などという悠長な気持は、すべてなくなってしまった昨今である。

この反動ではないが、日帰りの京都行の折、決して立ち寄る居酒屋ができた。初めは友人に紹介された店であるが、その亭主と意気投合。その温和で、とぼけた顔を見るのもたのしみながら、京都の様々な情報を得ることができるところである。

この居酒屋「老松」は、間口一間半、奥行三間ほどのこじんまりとした店で、八人掛けのカウンターだけであるから、いつも満員のことが多い。客筋も常連が多いらしく、時たまの珍入者の私でさえ、すでに顔なじみがで

きている。その一人に聞くと、四季折々の手造りの料理の味もさることながら、亭主との対話をたのしみに来ているという。誰からも好かれている亭主らしい。

ところが、この一見好人物そうな亭主が、実は大層な偏屈者であることを聞いた。「老松」唯一の使用人た、みさんからである。自分の気に入らない客が来ると、挨拶こそはするものの、あとがいけない。隣りの客には料理だ、酒だとか心配するが、何一つ出さないというのだ。催促をうけても知らん顔。遂にはどなり出す客を軽く往なして、「この店には、あんたに出すものは仕入れておまへん」の一言で、一向にとり合わない。そして、呆れ顔の客に、「よろしかったら、またどうぞ」と、追討ちをかけ、追い出してしまうというのだ。

私が九月の初め、今年四回目の訪問となった時は、珍らしく客が少なかった。カウンターの隅に二人連れがいただけだった。亭主との対話もはずんだ。

頃合をみて、私は「追い出し客」をする真意をただしてみた。一瞬、顔色を変えたものの、すぐにいつもの温和な顔にもどった亭主。たみさんをつかまえて、二人で珍妙な大論争を繰り広げるところとなった。

「おぼんだな、しゃべったのは。だから亭主には先出たれるし、子供には見離なされるんや」

「何いいますね、檀那はん。世の中には、もっとみじめな人もおますがな」

「そういって、慰さめている哀れな人よ。給料前借りして突進した、大仏はんの屋根瓦のご利益はおましたいね。亭主の一人でも見つけてくれましたかいな」

「そんなこと望んではおまへん」

「そうだろ、そうだろ、大仏はんかて、今日まで一人身やないか。なんで他人さまの世話などできますかい」

「気色悪いこといいないな、そんなこといわはると仏罰が当りまっせ」

「はっは、そんなことありやへん。仏はんはお慈悲深いんやさかい、罰などくらわせませんやな。それよりおぼんよ、大仏はんの隣りに坐りなされ、いい亭主やで」

「なんでですて、わてが大仏はんの隣りに。まだ死にとらないわ。冗談も休み休みにしてや」

「当り前や、大仏はんかて、少しは器量を選ぶで……。おぼん、おぼんの大仏はんはワシや」

「……」

「わからんかな、天下の大仏はんでは、相手が大きすぎるやさい、ワシが相手となってやるといってんやで」

「なんのことか、わてにはわかりまへん」

二人の会話は、なにか気まずいものとなってきた。亭主の気持を察した私が、余計な口を出すことになった。

「たみさん、プロポーズですよ」

「なんやて、プロポーズ？ そんなことおまへん」

「なんでや、ワシの顔をよく見いや。ウツついているように見えるか」

「いえ、見えまへん……。わて、どうしましょ」

「今さら恥ずかしがる歳やないで、ワシらは」

瓢箪から独楽、とはこのことだろう。思わぬ会話から思わぬことが派生したことになる。それぞれの連れ合いを亡くしてから十余年。再び新しい人生をともに歩むことになったのだ。

私は、十一月末に、紅葉美しい京都を訪ねることになっている。もちろん、「老松」の若夫婦の結婚式に参列するためである。なんとも待ち遠しい、たのしみな旅である。人生も旅であるが、こんなたのしい旅であってほしいと思う次第である。



念佛ひじり三国志

(空六)

—法然さやぶる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

建永元年、厳密には四月改元だから元久三年になる。

三月七日の夜、都大路はどんな気象状況だったであろうか。

藤原定家の日記「明月記」によれば、例年この前後は「天晴ル」「昼、雨降ル」のような記述が多い。同じ晴レでも一雨ふた雨をまじえるような不安定な気象と考えていい。

夜陰ともなれば春はあけぼの、薄っすらと霧が都大路にたなびいて、怪奇と謎を物語ろうとしていたかも知れない。

京極新邸の庭に、一つの黒い影が立った。どこから侵入してきたのだろうか。誰にも見とがめられなかったのか。

いや、かりに九条家の誰かが見かけたとしても、黙過するような人物だったにちがいない。そんな人物は、主人良経の歌仲間以外にはあり得ない。格式ばった手続きも前ぶれもなく勝手に出入りする男である。

この前年あたりから九条邸へ気安く出入りしている歌人を、定家の「明月記」から拾い出すと、清範、家長、秀能、宗宣などの名前が浮んでくる。

しかし、歌人と蜜行とは縁遠い。当然、人物も限られるであろう。史家によっては「明月記」がこの四カ月を

＜良経の寝所を襲う刺客＞



前号のあらすじ

鎌倉時代に入って、幕府の武家勢力が天下を支配することになったわけだが、もとより京の都にある朝廷の力が決してなくなつたわけではない。ことに後鳥羽上皇の隠然たる権勢は、王朝時代末の院政の時代にも等しかった。ともかく政略をほしきままに弄しながら、鎌倉の幕府方と対峙し、また都の貴族を思うがままに操つていた。その後鳥羽院が、熊野神社への行幸をたびたび行なつたことはつとに有名である。そしてその目的が、「熊野の山法師」といわれる修験者たちの呪術祈禱への接近にあつたことは、むしろあまり知られていない。那智ノ検校と呼ばれたぶ気味な黒幕が、後鳥羽院の側近として、術数をはかりめぐらしていたのである。まさに承久ノ変への軌跡が定まっていたのである。

法然上人の専修念仏の教えは、そうした時代の京都と鎌倉の民心に浸透していた。

故意に欠落されてある、という点で「定家犯人説」を推立する人もあるが、どうもこれは信じがたい。

事件を追う。

その謎の人物は、良経の寝所へ近づいた。

すでに良経は眠っていたらしい。死骸は仰向いたまま、咽喉と胸をつらぬかれていたという。それも鋭利な刃物だ。

ために一説には、刺客は梁をつたって良経寢所の真上へ接近し「吹き矢」を射た、とまで言われたほどである。

「吹き矢」術が当時、どこまでこの国で普及発達していたか不明である。槍か太刀で二突き三突き、と考えるのが常識であろう。

良経の寢所へ近づいた犯人は、寝顔を見おろして立ちはだかったのか。

このとき、良経は人の気配を察知して眼をあけたかも知れない。

しかし、死に顔は安らかであったという。恐怖も驚きもなかった見知った親しい顔を、発見したのだろう。

「こんな夜更けに何か急用かな」
声ぐらいはかけたか。

「是非お目にかけたい歌が出来まして」
「歌か……」

身を起しかけた良経へ、最初の槍ないし大刀が刺しまれた胸であろう。続いた咽喉笛は「止ドメ」だったにちがいない。

それにしても手練の太刀筋である。

絶叫も抵抗もなく、前太政大臣良経は安らかにことごとされた。

「尊卑分脈」良経公伝は末尾を以下のように結んでいる。

建仁二年二月二十七日、内覧氏ノ長者。

同年十二月二十五日、摂政。

元久元年正月五日、従一位。

同年十一月十六日、辞左大臣。

同年十二月十四日、太政大臣。

同二年四月二十七日、辞太政大臣。

建永元年三月七日薨ズ。頓死但シ寢所ニ於テ天井

ヨリ被刺殺云々。

藤原一族の「氏ノ長者」として父兼実のあとを継ぎ、位(くらい)人臣をきわめた良経は、三十八歳の生涯を一夜にして閉じた。

「愚管抄」によると、この事件の前後、兼実の実弟慈円(「愚管抄」の作者)は五辻殿で「薬師の修法」を行じていたという。

「三星合」という天体の凶兆を調伏する修法らしい。

宵ごとに西の空へ三つの星が寄り添うようにして現れた。金星、木星、土星である。

天下に一大凶事が発生する兆し、と考えられた。晴れたり降ったり不安定な気象のなかで、この接近し合った三つの星は容易に分離しなかった。

修法の三日目、宵をすぎると厚い雨雲が空をおおった。今にも沛然と降り出しそうな気配だ。でも降らなかった。慈円僧正は心魂をこめて祈念しつづける。

暁になって、しとしとと雨が降りだした。これが晴れあがったとき、戸外へ飛び出した侍僧が報告した。

「三つの星は離ればなれになりました」

修法は成就したのである。

だが、その直後に慈円僧正は甥良経の凶変を知る。

慈円は天文博士の安倍晴光に問いたです。

「この三星合は、君の御大事に候つるが、ついにからかひて消し候にしか。殿下に取りかえまいらせられるにけるにと」

と、断言する。

「君」とは土御門帝のことか。それとも後鳥羽上皇の

ことであろうか。慈円僧正自身を「君」とは表現すまい。

つまり三星合の凶兆は、王子や上皇の身に危険が及んだのであって、若い良経はその身がわりになって死んだ、と慈円は言いたげである。

さらに慈円は、この凶変を知足院忠実の怨霊の呪いだ、とも結論づける。

忠実は、慈円の祖父にあたる。白河法皇の勘気によれて蜚居閉門、政治上の立場を失った氏ノ長者を長男の忠通（兼実や慈円の父親）に奪われてしまった。

悶々たるなかで忠実は次男の頼長にたよる。頼長は有名な「悪左府」と呼ばれた才人である。保元の乱の首謀者であった。

乱は破れて頼長は奈良へ落ちようとして木津川の鵜飼の船のなかで死ぬ。忠実も責任を追究され、流罪されそうになるが、わが子関白忠通らの画策で知足院に籠居した。なお数年生きて応保二年（一一六二）六月、八十五歳の天寿を全うした。

天寿を全うしながらも、なお慈円はその怨霊の祟たりだ、と言う。何やら真相をおおいにかくするためのこじつけ

<九条京極邸>



の匂いがしないでもない。三星合の凶兆、それ自体も臭さい。

その証固に、良経急死の報は翌朝、飛電の如く都の貴族たちに告げられて走る。いずれも使者は慈円に随仕する比叡山の学生たちであった。

情報入手の素速さは、伝令の手ぎわ良さは、わが子の急死で茫然自失し、寝こんでしまった九条兼実と対象的である。事件の演出者だったか、とさえ錯覚する。

凶行現場に物的証固は何一つ残らなかったらしい。わずかに寝所に近い草むらに、槍か太刀をぬぐった血のりがこびりついた草がみられたという。

では、この真犯人は誰なのであるうか。

二

北面ノ武士。

堀河帝の嘉保二年（一〇九五）に白河上皇が初めてこの組織を制定した院に直属する武士間で、院の警固や治安の維持に任じた。

後鳥羽上皇は、この北面に加え新たに「西面ノ武士」を作った。制度化したのは承元二年（一一〇八）というこ

とになっているが、すでに三年前の建永年間、西面ノ武士は組織的に活動しはじめている。

北面とは主君が南に向って坐したとき(院の政所はつねに南面して作られた)いちずに主君の玉顔だけを拝し、命令に絶対服従する、という意味だ。

では西面とは何か。後鳥羽院が東方へ眼を見すえて政務を司る。この主君に絶対服従だから西面ノ武士である。

東方へ眼を見すえる。言わずと知れた鎌倉の北条執権を凝視するのである。すでにこの時点で、後鳥羽院にとって鎌倉北条は仮想敵国であった。

当然、西面ノ武士団の性格は、従来の北面とは異なってくる。北面の武士が治安警察だとしたら、彼らは政治警察であった。

比喩はあたっているかどうか。ドイツのナチス体制にあった初期の突撃隊と、勢力の拡大とともに組織された親衛隊との違いぐらいに考えてもよいであろう。

ところで西面ノ武士団のトップを形成したのが三浦秀康の兄弟たちである。

遠く東北地方、平家に入植して強大なローカル政権を

樹立した藤原秀郷の末裔で、河内や大和に実力をたくわえていた。秀能、秀澄らの弟がいた。いずれも勇武の気性に富み、鎌倉武士には強い反感をいだいてきた。父祖の奥州藤原氏が鎌倉武士団によって覆滅されているからである。

平賀朝雅が將軍頼家の急使で関東へ兵乱をおこしかけた元久二年(一二〇五)、彼を支援しようとした「官軍」の主力が西面ノ武士団であったことは言うまでもない。この事件以外にも、西面ノ武士は鎌倉の出先機関である六波羅探題としばしば悶着をくりかえしている。

西面ノ武士団の組織者は誰であったか。表向きは後鳥羽院にちがいない。しかし、背後から煽動し、院政の強力化を推進した人物の手に成ったとみるのが至当である。

後鳥羽院が、北条調伏のため最勝四天王院を造立し、日夜「呪い」をかけている事実は前で紹介した。この最勝四天王院の執行となったのが二位法印尊長である。

尊長は頼朝の妹と一条能保との間に生まれた子だ。源家と京都貴族との血が混血している。伯の頼朝や父の能保が死んで、武家政権が北条一族に掌握されてゆく現

在、尊長が怒りと焦燥にかられていたことは充分に想像がつく。ひところは公武合体で安定していた後鳥羽院の政治路線を強く「反北条」へねじ曲げた首謀者でもある。

尊長は、しばしば西面ノ武士たちを最勝四天王院へ集め、秀康兄弟らと密議を凝らしている。

その顕著な例が承久元年（一二二九）の七月に記録される。西面ノ武士たちは密議のあと、大内裏の守護職で源三位頼政の孫にあたる源頼茂を急襲してこれを殺した。頼茂が將軍位をねらった、というのが謀殺の理由であった。

京都在位の源家の遺孤が鎌倉將軍の地位をねらったから、と言って、後鳥羽院直属の政治警察が出勤する。一見、矛盾した行動に思われる。だが、ここらあたりが尊長や秀康兄弟のからくりであって、北条執権に協力しているかのような体裁をつくるうのである。

現に頼茂殺害の直後、最勝四天王院を取り壊している。鎌倉呪詛は一切中止、と言いたげなゼスチアである。内実はこのあたりから北条と本格的に対決する戦争準備が急速に進行していたのである。

後鳥羽院、いや二位法印尊長や秀康兄弟らの鎌倉欺瞞の手が、もう一つ打たれている。これも頼茂殺害の直後であるが、九条家の幼児を將軍の後継者として鎌倉へ送りこむのである。

九条家の幼児頼経。彼は建永元年の春の夜に暗殺された良経の長男、道家の子である。九条家さえ当てがっておけば、鎌倉北条との表面緩和は万全だ、という尊長らの意志が露骨にあらわれている。

そして承久三年には東西の本格的な戦争が暴発する。戦況は関東の大軍によってひと揉みにつぶされてしまうのだが、この承久ノ乱後、「吾妻鏡」は乱の首謀者を二位法印尊長と秀康兄弟らである、ときっぱり名指している。

だいたい話は先走ったが、建永元年春三月の時点で、九条良経を暗殺しなければならなかった経緯、つまり九条家と鎌倉北条との絡み合い、すくなくとも後鳥羽院側近の政治警察組織が現状をどのように分析していた事実は明らかになるであろう。曲水の宴をきっかけにいよいよ九条と北条は紐帯を強め、下手をすれば後鳥羽院暗殺も辞し兼ねぬ、という危機感が、新京極邸への刺客潜入で

あつた。

ではあの夜、潜入した刺客は誰なのであろうか。

もとより資料はない。推量、想像の域を出ない。

秀康の次弟に藤原秀能という男がいる。若いときから歌道にすぐれた才能を持っていた。後鳥羽院に寵愛されて、お歌所の常連でもあった。当然、歌道を通じて九条良経とも親しんでいる。

お歌所の寄人慈円僧正と親しかったのは言うまでもない。

この秀能あたりが、あの晩新京極邸へしのび入ったとしても、また良経と顔を合せたとしても、誰も見とがめることはしなかったであらう。彼の意図どおりにストーリーを進行できたはずである。

しかも、である。翌朝、九条家の急報で事件現場を検証したのが秀能自身なのである。犯人追究が暗礁に乗りあげるのも当然だ。

この秀能が意外な場面に登場してくる。事件の翌年建永二年の二月九日だ。六時礼讀の女房密通で、法然の弟子安楽房や住蓮が処刑されたときである。「四十八巻伝」は、

逆鱗イヨイヨサカリニシテ、官人秀能ニオオセテ
六条川原ニシテ安楽ヲ死罪ニ行ハルル時、奉行ノ
官人ニイトマヲ乞イ、ヒトリ日没ノ礼讀ヲ行ズル
ニ、紫雲空ニミチケレバ……云々

安楽房処刑の執行人官人秀能が、歌人三浦秀能であることは言うまでもない。

「四十八巻伝」の割り註「翼賛」も「秀能ハ秀郷將軍ノ末孫大和守秀宗ガ二男ナリ。モトハ土御門内府通親公ノ家ニ仕エ、後鳥羽院ノ北面ニ召サレテ堂上ヲ許サレ、和歌所ノ寄人武者所滝口左衛尉主馬首延尉出羽守、承久ノ乱後、熊野山ニ於テ出家ス。法名如顯」と紹介している。

一介の北面ノ武士にすぎなかった秀能が、和歌に通じて後鳥羽院の寵を得て、急角度に上昇していった姿が想像できる。とりわけ政治警察「西面ノ武士」の権勢は、

近ごろ西面とて撰びおかれたる、いつわて弓馬の芸を称するたぐいの官禄身に余り、宴歡心をまどはして、朝にうたい夕に舞い、立居のあらまし

にはあわれ戦さして先を駆けばやとのみ頼いて、

と「六代勝事記」は非難をこめる。

また兄の三浦秀康については、

秀康は官禄涯分にすぎて富有比類なし。五箇国の
竹符を併せて、進討の棟梁たりき

西面ノ武士たち、とりわけ秀康兄弟の権勢ぶりが判然
とする。

ところで官人秀能が、承久ノ乱の首謀者の一人として
鎌倉北条から指名を受け、探索されながら逃げおおせた
背景に熊野山が介在した「翼賛」の記述は興味深い。

九条良経の謀殺直前における那智ノ検校との接触者に
一つの「裏」が取れたことになりはしないか。

ついでのことながら良経の曲水の宴には、鎌倉から庭
園の造設者が送りこまれている。後鳥羽院の政治警察
は、その庭師を大江広元が派遣した刺客と疑ったわけ
だが、京都貴族の出身で、北条執権政治の官僚のトップ
にいた大江広元は西面グループに最も強くマークされた

人物である。

広元が大江姓を名乗りはじめたのは、ずっと後の建保
四年（一二二六）からであって、当時は中原姓だった。安
楽房遵西の一族でもある。

三

法然教団の有力な保護者であった九条家、とりわけそ
の氏ノ長者で、興福寺の訴え（奏状）をたしなめ退けた九
条良経の急死は、東山吉水の界限にも深刻な波紋を投げ
かけた。門弟の間で対立抗争が激化し始めたのである。

従来の浄土宗及びその周辺の歴史は、こうした門弟間
の対立抗争を、一念義と多念義との争い、つまり教義上
の問題としての狭隘な論点でとらえようとする。そこ
で幾多の矛盾や未解決な部分に蓬着し、無理な牽強附会
へ逃げる。

例えば興福寺奏状は、過激な専修念仏者として法本房
行空、成覚房幸西、安楽房遵西を指名するが、前二者は
一念義であり、安楽房は多念義である。両者ともに謗法
と言うのであれば、法然の全教義が否定し尽されること
になる。

行空だけが追放されて、幸西や遵西が不問に付された事実も合点がゆかぬはずである。

教義上の問題ではないのである。この元久年間から十年間に及んで京都政情をゆさぶり続けた対鎌倉武士との政治抗争の渦中へ、念仏ひじりたちも大なり小なり巻きこまれてしまったのであった。

「このままでは念仏教団はもろろんのこと、わが師法然の身にも重大な危険が及んでくるでありますよう」

若い念仏僧の訴えを、僧都明遍は黙って聞いていた。

光堂の庵室である。建永元年も夏が迫っている。この年は、暑気が足早に京の街を駆け抜けてゆくこうとする。

「それで……」

「是非、吉水ノ僧正に」

と若い念仏僧は慈円僧正の名前をあげた。宮廷と法然教団との仲立ちを頼んで欲しい、というのである。

「吉水ノ僧正であれば、九条殿下を通じて法然ご房自身の方が……」

明遍は言いかえた。

「いや、近ごろのお聖人はだいぶ頑なにならまして、誰方とも妥協なさろうとは致しませぬ」

「近ごろではあるまい法然ご房は昔から、こと仏法に關しては絶対に妥協なぞなさらぬお方じや。それで、吉水ノ僧正に何を頼もうというのか」

「専修念仏教団として中外に新宗派を宣言したわけですが、ここは一步退いて天台宗の一派に帰ることが妥当かと存じます」

「なるほど」

明遍は若い念仏僧をあらためて眺める。

氣おいふりばかりが目立つ専修念仏者のなかで、年も若いのになかなか冷静な政治感覚を持っている。

「そなた、証空とか申したな。法然ご房に仕えて古いのか」

「十四歳の折からです。十六年に及びます」

若く見えてもすでに三十歳か。この白面の容貌は貴紳の出自であろう。

「出家する前は？」

「実父は入道加賀權守親季でございますが、元服時に、いいえその出家時に久我家へ入籍しております」

「久我内大臣の猶子か」

「はい」

明遍はおどろいた。

久我内大臣とは、一代の棟腕をふるった久我通親ではないか。九条兼実はこの通親の政治力に圧倒され、ひところは謹慎蟄居に追いこまれている。もちろん明遍は、若き日の愛人高階栄子を通じて通親のことは知りつくしていた。

あの通親の猶子が法然の内弟子となっていたのか。

「出家時に猶子となったとは？」

猶子とは養子のことだ。

「はい、内府は今後出家するのなら法然ご房の下こそ、と申されました」

通親特有の時代の「先取り」であろう。専修念仏が大教団に発展することを、すでに読んでいたにちがいない。

「それでおぬし、吉水ノ僧正にわたりをつけ、専修念仏が天台宗に帰属するように一門の者を説得する自信があるのかな」

「ございます、誓って」

なかなかの自信である。

聞き上手の明遍は、そこで若い善恵房証空に抱負を存

分に語らせた。

証空は分析してみせた。法然のもとに集る念仏ひじりたちは思い上がっている。ことに鎌倉武士団とつながる一派は、明日にでも京洛の巷が武家政権でおおいづかれる、と信じこんでいる。

しかし、天下の政治はそんな野合の衆に左右されるものではない。鎌倉武士団と言っても現在の執権北条氏は、保守にのみ身をやつし、積極的な政治など手がけようとする器量はない。

「……所詮は田舎武士でございます。せいぜい所領を一枚でもふやすことに窮々としているのです。政治は何と申しまでも都のものです。この至難な政局に遭遇して、私も念仏教団の生きる道は」

体制の一角に地歩を占めて、着実に教線を伸ばしてゆく以外に方法はない、と再び断言する。

いかにも現実には即した健全な考え方だ、と明遍は思った。

明遍が証空を伴い、西山善峰に慈円僧正を訪れたのは、それから数日後のことであった。

慈円はこの出家住まいをこよなく愛しているようだ。

彼はここを出慮して天台座主となったり、四天王寺の別当なぞと栄職にしばしば転ずるのであったが、じきに職を辞してはこの山奥へ隠棲してしまうのである。

愛したのは、ただ感情のうえだけではなかった。

明遍らが訪れたとき、慈円は涼風が吹きぬける書院でおびたらしい書類をつみ上げて何やら述作にたずさわっていた。

「丁度よいところへまいった」

明遍の顔をなつかしげに見つめる。

「日ごろ何かとご無沙汰をかさねております」

「いま平治の乱を調べているところだ。おぬしの父信西入道だが、いち早く大和の田原へ逃げのびているな」

「はい」

「地面に穴を堀って、かくれたが、いったい何をするつもりだったのか。ただ死を待って、あんなところへもぐりこんだのかな」

歴史の真相を追究したい慈円の眼光はらんと輝いている。

「私も同行しました。死ぬためではございませんぬ」

「うむ、そうであらう。あのあと何処へゆくつもりだっ

たのじゃ」

「しばらく身をかくしたあと、海を渡って唐土へ亡命致す計画で」

「唐土へか、なるほど……」

慈円は膝を叩いた。

「私にも同行せよ、と申した記憶がございます」

「さすがは信西入道じゃ、計画は遠大、唐土までも逃げのびる所存であったか。で、それがなぜ」

「夜になり、父はじっと星空を見つめておりましたが、突然穴の中で叫びました。万策尽きた。わしの生涯は終ったと」

「空の成行きを見たのじゃな。唐土へ逃がれる星の道はなかったと申すのじゃな」

「さようでございます」

「わかったぞ。有難い。これで永年の疑問が一つ解明できたわい」

そこで慈円は、じろりと明遍のかたわらに坐る証空へ視線を移した。この坊主は何者か、と問いかける眼差しであった。

(つづく)

二 編集後記 二

○仲秋の夜長に灯(と)もす明かりが心細い。

自(みずか)らを灯とし

法を灯とし

他を灯とすることなかれ

自らに帰依し

法に帰依し

他に帰依することなかれ

(《長阿含經》より)

と教え誡められたことであるが、私自身の輝きは燐光のほどもなく、長い秋の夜闇に耐えられそうもない。法(ダルマ)の灯が恋しい。仏(ブッダ)の光明が慕わしい。「つきかげのいたらぬさとはなけれどながむるひとのところにぞすむ」と詠じられた法然上人の教えとはいえ、今この時、ながめる人、私の心の曇りが、心の翳りがいたずらにうらめしい。しかしこうした折にこそ、ひたすらな念仏こそが、

光明遍照 十方世界

念仏衆生 摂取不捨

という「撰益文」の教えのごとく、生きる指針となってくるのであろう。私にはとてもむずかしいことであるが、今は妄念を捨てて静かな一夜の精進にいそしみたい。

一本を書架に加へし夜長かな 越央子

人ごとの心に触れる秋の風 ゆう一

○さて十月になると、そちこちの十夜寺からは、双盤の鐘の音に乗せて十夜念仏の唱和が聞える。多くの善男善女が、「み仏に心をあずける」思いで、同行同声する心がゆかしい。「み仏さまは、すべてをお見通しになっている。さしのべて下さる慈悲のおん手に、なにもかもおまかせしよう」という日めくりの標語のように、「南無阿弥陀仏」の一声一声に心をこめて、阿弥陀如来の大慈大悲にすがりたい。しかも、自分一人ではなく、同じ行に励む多くの人々とともに心を一に相合わせて行なう——これが十夜念仏の意義であらう。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年九月二十五日 印刷
昭和五十四年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人懺仰会

電話東京二六二局五九四四番

千二二 振替東京八一八二一八七番

=新刊=

大正大学教授 竹中信常著

『仏教—心理と儀礼—』

A 5 判 380頁 定価 7,500 円 (送料実費)

◎宗教学界の権威である著者が、最新刊の『仏教—心理と儀礼—』を新たに上梓して、その永年の研究成果を発表されたもの。専門的な詳細な研究書ではあるが、宗教に関心を寄せる多くの人に広く推薦したい。

=好評発売中=

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円 (送料実費)

『宗 教 学 序 説』

A 5 判 474頁 定価 6,500 円 (送料実費)

=新刊=

花園大学教授 藤吉慈海著

『法然上人御法語講話』上, 下二巻

(上巻) B 6 判 242頁 定価1,300円 (送料実費)

(下巻) B 6 判 278頁 定価1,500円

『阿弥陀経講話 附 般若心経の話』

B 6 判 128頁 定価 600 円 (送料実費)

発行 山喜房仏書林

〒 113

東京都文京区本郷 5-28-44

振替 (東京) 0-1900